



蘇桶のわくを話る妙母は  
 又疾る飯小鞆くこりあ  
 名の月結む続るは抜く  
 杉能あや中がーアア  
 中波の看板つる尖く三テ  
 古志辨物言もあれし

見龍

起波

蘭里

湖十

波

里





寝て思ひ代へたる膝杖  
 清く心けり重き子あまふ事  
 黒鴨のけつひくも志保らふ  
 者を推してふる皮剥  
 新くや重のまのせとこつ  
 此あおとてまけ仙居の結  
 角力取投教えれく奇麗く  
 翁の心也別當の意  
 十 詠 里 波 十 詠 波 十 詠 里 波 十 詠

筆を引く為儀居の紋も風物  
 希く法をくつらか間結  
 長恨歌何との時か思ひ出  
 志のねり 志のねり 志のねり  
 翁のあふあつまほいふまほく  
 志のねりのまほくまほくまほく  
 十 詠 里 波 十 詠 波 十 詠 里 波 十 詠

家の聖六絶一寺抄子

拾子集一巻一の梵編

管簾ニの舟乃拍子そ

うのとも画並撰中徳

空へもこの落る美乃る

未子誤行く美いむる

魯兆

湖十

柴翁

超波

平砂

翁

好勝能西國便乞のま  
其居とゆ来寸喰く寐ぬ  
守鐘午少傳のまいと少  
羊の舞ふ多や好くす  
浮くやち空の神も冥も  
哀の影しふ志絶んり行列  
うよまの桂男の花うら持  
砂より外に吐れぬも満り

十 毛 所 波 十 翁 所

春の海響の懐さ中へ  
伊豆の海山に唄やう運  
うよまの酒に涙みけさし  
根を多きうに深いたる  
庭をぬく驛後の能く切く  
地み道しれく懣る辨天  
健のたよりと海にに運相  
青竹の葉若口留

十 翁 所 波 十 翁 所

一とせの烟かきぬとをたす  
 久らさち地の雨かきしよ  
 流るる衣の上へ縋と所  
 鏡磨もよまぬ日  
 七産草乃まつよおと投つ田  
 泪かほすハ母の子かもか  
 二階へおし月の雨か  
 蕙の細工猪くらかり  
 十波 十 翁 波 十 翁

ち  
 繁雜乃存と待とを引れ  
 物もよめ人質の支  
 唐乃文よむ志の息りこれ  
 油へ散るる灯かき飛  
 遠近の水かかり岩島  
 おお乃~~~~帯の切形  
 十波 十 翁 波 十 翁

夏牡丹花より下の花あり

其畔

面越えくらく敷す蝙蝠 起波

水浴ハきりこの魚ふをのりて 豊川

井筒より紐ハ 葎の積やう 湖十

月の経代官の糸小五寸角 歩閑

海よりけりねく 麻れ横飛 川

下  
七  
五



手折ていぬそのお糸あふ  
 胸等用と太田道灌  
 芳しきものをねあふ縁にて  
 杉扇とねて悲うさきあ  
 初心といそるるく一字  
 みあめの色い際色も  
 天人も三保の杉原とく  
 うかやぶきききぬけくも

十箇波時岡十時

下七

浅草とあふふくはる茶の盆  
 前の葦垣の明新の女の皿  
 玉椀の箱の玉の丸のおの形を  
 才の木の枕の帯と解る事  
 長の日の輝があるくも山の陽の末  
 青の鬼の灯のはの町の一の石  
 念の佛の千の尊のあの女の形を  
 ひとくはなす寸の子の夢

川岡波時十川十時

下八

菱の餅の定規の餅と為  
 戸もめら破る羅生門の存  
 ころや個じもそこ指の指  
 ころころの物水晶の珠数  
 基笠の黒天鵝兎のころじ  
 ころころの国の大潤ハ龍  
 照月ふたのまき蓮の敗れ際  
 木葉のころ(賣ぬ無花菓  
 川十時波岡川十時

新浜の熊本底の月かん  
 猿の馬のと伝ふの海  
 けころの扱条の後とあま  
 上の醍醐ハ周く覚え向  
 咲葉の人の之ハ何付  
 ころころの葉もころ  
 川十時波岡

海のむらさき色もむのさう

湖南

あつらゐるも省渚美

湖十

錦機新もあて字と織女

為邦

あつらの因果ハ幸分飲ゆ

起波

飛越々舟と舟との間の内

系井

西氏冬氏の妻ハ穉方

里郷

鳴子繩三子法(一) 竈入  
帯ても尻(一) 戸のど(一) 打  
聲(一) 鳥抱(一) 所(一) 又(一) あり(一) び  
お(一) 又(一) 恋(一) との(一) 名(一) とも(一) 聞  
友(一) 橋(一) 渡(一) 神(一) しく(一) とも(一) 無(一) とも(一) 地(一) 見  
お(一) 書(一) とも(一) しく(一) 軒(一) も(一) 殊(一) 又(一)  
本(一) 堂(一) (一) 涼(一) みの(一) 海(一) 不(一) 雲(一) の(一) 月  
温(一) 泉(一) (一) 突(一) 落(一) 寸(一) 湯(一) 井(一) の(一) 流

十 井 波 邦 心 卷 十

十  
は(一) う(一) ら(一) 筆(一) 投(一) 付(一) て(一) 振(一) 向(一) せ  
こ(一) 枝(一) の(一) 松(一) 身(一) 致(一) の(一) 付  
以(一) 磨(一) 若(一) 末(一) 柄(一) 五(一) 身(一) 一(一) 抱(一) 貝  
平(一) 目(一) の(一) 上(一) へ(一) の(一) り(一) 飯(一) 轉

鳥(一) の(一) 考(一) 所(一) 七(一) 東(一) 毛(一) 露(一) 正(一) 一  
お(一) 指(一) の(一) 髪(一) 子(一) 不(一) 二(一) 度(一) ぐ  
物(一) 一(一) 身(一) 大(一) 盃(一) 一(一) 身(一) ぬ(一) め(一) ぬ  
産(一) 方(一) 一(一) 身(一) 名(一) 一(一) 身(一) 里(一) 川

十 波 邦 心 卷 十

遠里ハ紫の火若と帝婿も  
関所破りの昔と管也  
逢ぬこの倉法種ハ神保  
又船屋賣の樽若引  
はの橋にハ寸釘の一二百  
風やまゝくしゝおくの月  
ふらまゝの鯉の中ハ若の裸  
松若おし 秋措や

井 心 波 井 苗 邦 十

甲のの味線の外有ハ寸  
光物も金のくし  
乃しとと鯉中もあつた友  
五日く来たる船の仕合  
咲法の星ハ角くその河  
梶の芽出のいさちん流

井 苗 邦 波 十 心

世中子唐大牡丹の生る哉 巴船

もろこし へん ともかいる 羅 超波

兼こころ山 金と波おれく 無来

肴 ちんくくと 活る あり 湖十

階子 揺揺とくる 月の宿 魚貫

くすの 春の 懐る 物 山

信吉の法衣の外へはるるに  
人若くは色も似る  
怨霊の下へはるるに  
匠と号く國のあか  
者夏ハ州のあかへう満る  
る盗人の憎み横暴  
ある時冬はあかへう満る  
の雷はくは水あか  
十 船 次 十 波 十 水 十 月

志のつら小庭はむの二之日  
かきりもまゝ雛乃歌  
ちる所へ在原寺の  
ゆりあはるるに  
あざくはあはるるに  
は一月のこし  
慰め地獄見あはるるに  
難極の細い雨の夜  
十 水 十 波 十 次 十 月

大船の様は直寸孤を  
出〜ゆ孫の身を吾等  
夕顔の世を持顔は実を  
古よと條も新〜知る  
善治の思望しぬ秋の香  
振〜者〜魚 又第の〜ら  
吉原やか計二人の冬より  
玉の結け〜珠殿も眺  
十 波 本 十 船

各垢も望を待ぬ鼓の清さ  
もつ〜と切に柳柳の葉  
知衆〜櫻〜大工海は結  
も〜つ〜字〜〜山〜児  
春のそこの舵は編直み  
南と北〜東は〜名計  
電 炎 十 船 波 東



勢然と云の多々之様おちりて哉

湖連

和清の天ハ起句よまゝ介しよ 湖十

鞍よはる金覆輪と合おせて 湖雁

並木の松ゆゑお生ふ一徒 起波

甚弱心是ハ氣の付風共内 茶井

綱代よりしるまゝのさしほのそよ 故一

熊の棚見て来た人の考情し  
其考の考も若く初う持  
一二月やるも若く其のまへ  
仇寐子豆の出る若く物  
糸屋川梅と柳と借寸汗拭  
乞食の子も新しい矣  
真赤小郎ゆくと肩と替て居也  
追ひれる度小鶴雞、毛ぬけ  
十 連 井 一 層 波 連 十

十五日鬼を波の初身  
志又届者を斜鉢忘れる  
一ッ飲む伯母と持たれり 杓記 加  
之 糸 坂 を 大 切 平 一 鷗  
世に、ある鳩の素毛札と入  
嵐の、少後を考、ま、家中  
はあくと、糸合舟の出情、  
五百羅漢、五百ある人  
井 十 連 一 波 井 一 層

瑪瑙と琉璃降下は龍若竜  
竹田、家小絶ぬ少切主  
夕の月油煙のゆる花薄  
葡萄をとりハ董小葡萄を  
秋若結鶴も及び守あし上  
思ふお園尔口曲るらん  
妹をみ存明とく玉むま  
比丘定く来高坊麻を好む

波 丁 一 井 波 丁 十

片時雨店をさすさ度あり  
二日ほどと報の恰好  
蟻通る士、新也出る海  
旭の傾子ぬる大明星  
雲ら鎖とハさしれ巻の有  
あくく雀の、書子飛ぶ

一 進 十 丁 波 井

猫の耳睡神と勤く牡丹哉

桑揚

祝も水子いろく子又超波

鞠垣千手代のあを親と吟國

洞実石れ休む中湖十

日と月の位神分る日ハ左有林

木鬼若取中小苗有合園

鼠を皆差りる者連く本孫死  
 鼻帯入家以日の娘  
 糸もも云禪のある纏子の帯  
 祓多き勢あり大飯  
 飛李一ツく子累を道  
 何を吹く能知、字も持  
 橋を下壁を壁と吐く  
 涙、付く、力、つくと寐

波 十 國 坡 楊 林 十 揚 坡

氷る月馬軻の柱法虎家色 平砂  
 来ると童の笑ふこつ口 國  
 時くけく袋袴もる志下風 坡  
 下葉ハを吹くく咲る山吹 揚  
 増上寺喜の紋も立ぬこ 十  
 且那の紋もよある燈籠 林  
 中乃々の却るよの酒棧姫 物  
 輾 轆 首 みる 女 する あり けり 波

灯を玉女既のものとけさし桶  
 角が腥ま剛力の貝  
 塘くく銅菴たる契あまふ  
 若生へり衆のまも同か  
 親鸞のほちもく出する道の家  
 心の月子素湯とどぐく  
 目まはひあふまきくハ柄もまらう  
 連の保ととめる山大  
 林十園波栢林十園

欠落の幾日か来ぬ袋足袋  
 門お庭お幅于な孝  
 初瀬ハ又そと替りくニは  
 孟志くくむ桑物の窓  
 花結、似小宵中張出す法の幕  
 花もるまの筆の階子志まらく  
 学林砂園林栢

月と虫の家と何廿日軒

半溪

一とハ〜物の名〜  
湖十

振俗志たさふたういふけ〜  
魚貫

鼻端〜るるの右後  
起波

名門を忽海り〜  
為邦

何れ〜秋の〜  
百菴

ふりま 多 拖灯乃 露半紙  
志のおりり 緋とせむ  
瀬冬小判のあふ世新紙  
郷侍の提正 一 太  
格うは 塩と外うか 赤鯛  
仕りんせ 中引く寸あき 裁  
女うぬ 際く 舞く 高笑  
ま 精をらんくも せんす 上  
十 波 浪 船 菴 次 波 浪

怖しい 院の 浪屋乃 くれし 舟  
揺る 柳 一 一 ゆり 三日月  
縫う なる 佛へ 世の 際を 二  
龜の 背中 此うりく ちうり 不  
いせの 海を 広く 深ふ 和ま せ  
夕日 ち 留る 波 波 の 笠  
敷盛 妙 妙 一 一 一 一 一  
さし 一 一 一 の 妙 妙 人  
十 菴 浪 波 菴 邦 十 菴



中の町巨雄藩國はるるの  
 世と接するの死ねるは  
 洞取も多訓あるを  
 祿宜の欠もつる庭  
 南めつるす崩れす雲の峰  
 晒と持とすの志あふ  
 石川も解も思く世の中  
 羊巾着すし一麻のよる  
 十 邦 十 波 十 菴 十 侯 十 邦

花より新買もの此を  
 三百戒の比丘し  
 日の綾み盟の水若も首を  
 うく絹紗とねるす強敵  
 猫の子此能をうく  
 素人細工のまる物干  
 十 邦 十 波 十 侯 十 菴

花牡丹あといと蟻の初う南

封示

空やまひの初夏の趣

湖十

筏繋手舟をりや船はらん

圃月

峠の水多甘や海ありなり

起波

風鳥の風を吐出すまの月

十

夷の考と終ハ則

月

縮菟ハ光て祿の漸志は  
 他ハ階子を以て待候  
 昔はこころの計は後抑く  
 口々膳と拵く見侍  
 酸漿ハ紋に安さの唱海河  
 正観音小物数寄は形  
 弓取ハ鶴の出ぬくふ家乳  
 大由々礼乃上り位は月  
 月十岐示十月示

古土圭時も私ねくから  
 橋ハ松杓多志の方丈  
 妻乞と地帯と甲ハ雉の色  
 雁瘡何る青根ハ崎  
 酢ハひせく起さるよん佐  
 由礼ハ修せり物の梁  
 やものハ地帯の真ハ海  
 芝伏せあし大木戸の囃  
 月十岐示十月示

換換子十箇盤壺て吹せたり  
胡椒取中不星ハ降都と  
瀧グ下橋の枝此帝流  
堀ぐ古しる女の敷く  
木のりの腰く出ふ(大輓もか)  
四十より事おもそ飛ぶ及るは  
夜をよらら則の窓小廢る舟  
光る、晝は也州のちるか  
月 十 波 示 十 月 示 波

下共

世の形や小統の葉と一抱  
橘姫の匂ふ 十五 立 示 波  
飛花落葉折む筈の木も登  
春のり来れと小里芽 十 示 波  
糸肉み飼養の舞をへく  
又かうは美きの上ハ壺 示 波

貧しは子せりて高小壯斗哉

魚貫

夏越くしる蝶れ羽志湖十

長堤大古名を引出く百菴

流まき煙るかききの炭超波

月の色汲拵く置角釣瓶故一

砧うまあけく笑み豎縞菴

秋風子くまのり 豆俵十  
あつた所へ疾る 走火  
伸上る根津の暗簾乃柳さ 波  
兄君の海尔落寸 眉合一  
細工まじ思花屋さ 輕節菴  
輾とり輾の 輾子習書子十  
水臺ハ象子付し七産物 質  
乳物婆之 結帯質のこ 波

鞆哲んあのみ 帯の裸る一  
借子極く棒の燦 拭菴  
美昆布ふか 松の物とる 十  
し 物し 君知る 妻菊 次  
古梳も溜り 雲さし くのり 葉波  
阿弥陀 笠さし 通る 文高 一  
傀儡師久 杉町と 尾島町 菴  
くとの為の 袖と 肩 十

冬出の少句は雪のかりあるは  
藤の女も遠く宵の灯は色は  
垂櫓の肩も薄く色も市一  
ふりり舞臺の國産化花  
引結の道徳の手紙習ふ録十  
柄杓奪奪の熏風の月夜  
觸事も百この橋をしりきり波  
牌の神の何崇るむむ一

干す傘のあまの響古むらり  
おもひ記顔の檜桐第賣十  
元はくともおもく善の綱  
乞食も壁と掛くも縁柳張一  
三味線ハ来々葉の老の花  
階黄鱈子 妻も浦汐瓶

張

集來年每欲修之書と彌久  
多杜と書何也獨菴予  
志在淺乎と一書性身  
去以書修不表在出集  
以月清居万の字を好むを  
飛去之了居了集了身  
西書不也の字を好むを

書



舟を居る未くすと是河首不  
夏の海流しし年入るに  
津浪深き舟を也祝は  
向と月一輪有仰るやと  
も孝見る由し湯ふれし  
遠く未く春は海を月  
あぢく不の故月一雨無

高津く舟結美谷い舟寄に  
由し集る舟を居し去禮  
徳行の人ふいよるあく春  
我の三子身縁寄去の志の孝

無海十

当世末の中

信より出く花海に

享保丙辰初夏

21

日大橋通町目

江府 藤月堂 若菜屋小共衛板

俳諧書目録

類 棋 子	三冊	集 尾 琴	三冊
後 餘 花 千 二 百 句	二冊	三 上 吟	一冊
代 こ ろ 心 と	五冊	續 の こ ろ	二冊
俳 夜 曲	二冊	百 福 壽	二冊
續 江 戸 心 し	二冊	續 福 壽	二冊
誦 太 所	二冊	百 花 實	二冊
花 擔 籠	二冊	花 巾 の 素	二冊
帛 の い と	三冊	倉 の 衆	三冊



